

東洋大学史ブックレット

11



東洋大学

人物で見る東洋大学

— 東洋大学人物列伝・活躍する出身者 —

山田利明

東洋大学史ブックレット 11

人物で見る東洋大学

—東洋大学人物列伝・活躍する出身者—

山田 利明

秋庭^{あきば} 太郎^{たろう}（一九〇七～一九八五） 演劇史研究・日本大学教授

東京都出身。昭和五（一九三〇）年、東洋大学大学部支那哲学東洋文学科卒。在学中より江戸・明治の演劇史・風俗史に興味をもち、文筆活動に従事します。その頃に執筆し始めた『日本新劇史』を戦後昭和三〇（一九五五）年に刊行。これが第七回芸術選奨（演劇部門）を受賞。大学卒業後に『東都明治演劇史』を完成しています。戦中は陸軍将校としてニューギニアに転戦しました。この時の手記が没後『ニューギニアの戦い』として出版され、ニューギニア戦の過酷な状況が知られました。

演劇史の一方で、永井荷風に憧れ『永井荷風伝』を出し読売文学賞を受賞しています。また終戦直後から日本大学の図書館に勤め、館長にまで昇りました。館長退任後は日本大学商学部の教授に転じました。当時の受講生の話では、冬も夏も和服姿で講義、かなり面白い講義であったといっています。他大学からも聴講に来るほどの人気でした。

安藤 あんどう正純 まさずみ

(一八七六～一九五五)

政治家・国務大臣



東京都出身。浄土真宗大谷派の寺に生まれました。明治二八(一八九五)年、哲学館卒業といわれますが哲学館の記録にその名はありません。東洋大学の記録には大正七(一九一八)年以前に講師号が贈られています。この称号は哲学館・東洋大学の出身者で学術的・社会的業績を挙げた人に贈呈される称号ですから出

身者であることに違いありません。哲学館の後、東京専門学校(現早稲田大学)を卒業し、陸羯南くわかつなんの主宰した新聞『日本』の記者となりました。時期的には正岡子規とほぼ同じ頃の社員です。後に朝日新聞に移り編集局長を務めました。大正九(一九二〇)年、衆議院議員選挙に立候補し当選。以後当選十一回、犬養内閣では文部政務次官を務めました。太平洋戦争中は、大政翼賛会の推薦なく非推薦で当選。戦後は吉田内閣で国務

大臣、鳩山(二郎)内閣で文部大臣となります。

戦前からの政友会系議員として活躍しましたが、その反軍的主張から戦中は苦しい立場に立ちました。

池中 いけなか康雄 やすお

(一九一四～一九九二)

元マラソン世界記録保持者・日本陸上競技連盟オリン

ピック代表コーチ

大分県出身。旧制中津中学校卒業後、昭和七(一九三二)年東洋大学専門部入学、以後予科・文学部国文学科と進み、昭和一二(一九三七)年卒業。

池中は予科入学の翌昭和一〇(一九三五)年四月三日、神宮外苑競技場で開催されたベルリンオリンピックピックのマラソン代表候補競技会で、二時間二六分四四秒



東洋大学陸上部提供

の世界記録で優勝しました。この記録はアメリカのアルバート・マイケルセンの持っていた世界記録二時間二十九分二秒を二分一八秒短縮した記録でしたが、同じ年の一月三日に開かれた明治神宮体育大会で孫基禎によって二秒縮められてしまいました。しかし、池中は代表候補とされ、翌昭和一一（一九三六）年五月に行われる最終選考会に臨むことになったのです。ところが選考会目前に、中津に住む実弟が重態となり、急ぎ帰省した池中は、輸血を必要とする弟のために多量の採血を行い東京に戻ったのでした。練習を再開したものの体調は回復せず、そのまま最終選考会に出場、レース中に身体に異常をきたし棄権しました。これでオリンピック出場は夢はついえたのです。ベルリン大会のマラソンでは、孫基禎と日本大学の鈴木房重、明治大学の南昇龍が出場し、孫が金、南が銅メダルを獲得しました。

池中は昭和一五（一九四〇）年に開催されるオリンピック東京大会に向け練習を重ねましたが、日中戦争が激しさを増してきたために東京は大会を返上。替わってヘルシンキの開催となったものの、ドイツのポーランド進攻による第二次大戦の勃発によって中止となってしまったのです。

昭和二〇（一九四五）年になると空襲も激しさを増したため、池中は故郷中津に帰り中津中学の教員になりました。戦後の中津中学陸上部は九州大会で常に優勝するほど強く、生徒の健康管理にもかなり気をつけていたそうです。そうした中、若い選手養成のために、昭和二七（一九五二）年、別府マラソン（現別府・大分毎日マラソン）の開催を思い立ち、その実現に尽力しました。

JR日豊本線東中津駅の線路脇に、池中の顕彰碑が平成一〇（一九九八）年に建てられました。そこには、「昭和一〇年四月三日、二時間二六分四四秒」と、池中の記録した当時の世界記録が刻まれています。

植木 等（一九二六～二〇〇七） 歌手・俳優

三重県出身。あるいは愛知県とするものがあるが、愛知は出生地。昭和一四（一九三九年）、実家の寺を継ぐため上京し駒込の真浄寺に入り、修行しながら京北中学校に通います。昭和一九（一九四四）年、東洋大学専門部国漢科入学。ほとんど勤労働員に明け暮れました。昭和二〇（一九四五）年八月終戦。バンド・ボーイなどのアルバイトを重ねながらギターを独修し、バンドを結成するなど音楽活動に入ります。昭和二二（一九四七）年東洋大学専門部卒業。

昭和三二（一九五七）年、ハナ肇や谷啓のキューバン・キャッツに移籍して、軽妙なコメディール路線を志向します。これが成功したのは、昭和三四（一九五九）年にフジテレビの昼の番組「おとなの漫画」に、クレージー・キャッツがレギュラーとして出演するようになってからです。この番組は正味一〇分程の短い番組で、本業の音楽は添え物で短いコントを主にした内容でした。これが爆発的な人気をよび一躍クレー

ジー・キャッツの名が知られるようになります。この人気を決定的にしたのは、昭和三六（一九六一）年から日本テレビ日曜の夕食時に放映された歌謡番組「シャボン玉ホリデー」です。ここでのコントやギャグがまたたく間に全国的に広まり、一世を風靡します。時はまさに高度経済成長期の入口。オリンピックの東京大会に向けて、首都東京は、近代都市へ面目を一新しようとしていた時代です。こうした世上の好景気ブームによって、調子のよいメロディーに乗った植木の唄うコメディーションングは大流行し、社会現象にもなりました。もっとも植木はかなり真面目な性格で、歌詞の文句に悩むこともあったといえます。

晩年は一転して、シリアスな役をこなす性格俳優として活躍しました。

小野 十三郎（一九〇三～一九九六） 詩人・帝塚山学院大学教授

大阪府出身。本名は藤三郎（一九〇三～一九九六）。天王寺中学校卒業後、上京して東洋大学専門学部文化

学科入学（大正二〇（一九二二）年）。しかし数ヶ月後に中退。当時、白山上の書店南天堂の二階には喫茶部があり、学生や若い文士たちの溜まり場となっていました。退学後の小野もよくここに来ては岡本潤や壺井繁治らと時を過ごしていたのです。ここから『弾道』を創刊するなど、小野の詩友と作詩活動は広がります。後に大阪に帰り、工場地帯に取材した作品を発表するなど、社会との接点を求めるようになりました。その一方で吉本興業文芸部に籍を置いて漫才作家を兼ねていました。この時、エンタツ・アチャコの漫才作家として売り出した秋田実を知ったのです。

戦後は大阪文学学校を開設して、詩や児童文学作家などの育成に務めました。これが小野の目ざした文学の大衆化の一つの方向だったのです。もう一つの主張であった反戦についても、市民運動として指導し、あくまでも大衆とともにあることを求めました。また、帝塚山学院大学で教授を務めました。



勝^{かつ}承^よ夫^お（一九〇二～一九八二） 詩人・作詞家

東京都出身。大正一三（一九二四）年東洋大学専門学部文化学科卒業。在学中より作詩を行い、雑誌『新詩人』を創刊、注目されるようになりました。

凍れる月影空に冴えて 真冬の荒波よする小島

思えよ灯台守る人の 尊きやさしき愛の心

「灯台守」と題されたこの歌は、小学校・中学校の

教科書に採られたことから知る人も少なくありません。詩は、勝承夫の作。曲はイギリス民謡とされることが多いのですが、原曲は“The Golden Rule”（黄金律）というアメリカ歌曲集に収められていた讚美歌という指摘もあります。この曲は、明治時代に大和田建樹によって、「旅泊」という詞をつけて出され、その後さらに佐佐木信綱が「助け舟」という詞をつけました。大和田の詞は、海浜に旅泊する舟の平穏な一夜を

記したものの。これに対して佐佐木の詞は、嵐の海の荒波に翻弄される舟を助けに向かう小舟の勇姿を描いています。勝の詞は佐佐木の詞のイメージを継承したもののようですが、灯台守を主題としていて、その仕事の過酷さを描いています。三人が三人とも海を描いたところが面白く感じられます。ところが一人は平穏な海、二人が逆巻く海を記し、全く対照的な構成になっています。今や全国の灯台のほとんどが自動化して無人灯台になっていますから、この歌の詞も変わるようになるのでしょうか。

勝承夫は大学から小学校に至るまでの校歌を、作曲家の平井康三郎・信時潔・団伊玖磨などと共に作っています。附属牛久高校の校歌も勝の作詞、平井康三郎の曲です。

後年、日本音楽著作権協会会長、東洋大学理事長を務めました。

河口^{かわぐち} 慧海^{えいかい}（一八六六～一九四五） 僧侶・仏教学者・宗教大学（現大正大学）教授



幼名は定治郎。堺市の樽職人の河口定吉の子として生まれ、家業を継ぐために小学校を中退しましたが、学業への思いは断ち難く、夜学や私塾に通い、漢学や英語を学びました。明治二一（一八八八）年、上京して哲学館に入学したことが『哲学館講義録』（明治三年第一期二年級）に記されており、大正七（一九一八）年

以前に名誉講師（哲学館・私立東洋大学出身者で優れた研究・著述を出したものに与えられる称号）が贈られています。在学中に本所にあつた黄檗宗五百羅漢寺で得度し出家、慧海と改名します。二十四歳の若さで同寺住職となりますが、翌年辞職します。この頃からサンスクリット語、チベット語を習い始め、後にはパーリー語をも学びます。同時に、日本の仏教研究が漢訳仏典のみを対象としていることに対して、サンスクリット語やチベット語による仏典の研究を提唱し、原典の入手のためにチベットに入国を志すようにな

ります。しかし、当時のチベットは、鎖国状態にあり、入国は不可能な状況にありました。

明治三〇（一八九七）年、インドのカルカッタに着き、およそ一年間チベット語の学習につとめ、翌々年、ネパールのカトマンズに到ります。さらに二年後の、明治三四（一九〇二）年によくチベットの首都ラサに到着しました。このラサ滞在はほぼ一年に及びその間、仏典の蒐集に努めましたが、ついに日本人らしいとの噂が立ち、急遽ラサを脱出してインドに逃れました。ところがラサ滞在中の知人の多くが投獄されていることを伝え聞き、救出のためにネパールに赴き、ネパール国王を通してチベット法王ダライ・ラマに上書を上呈しました。

これらの危難にあふれた踏査行は、後に『西藏旅行記』（『チベット旅行記』）としてまとめられました。その後、大正二（一九一三）年から二年間にわたって再度チベットに入り、チベット一切経を得ました。後に、宗教大学（現大正大学）教授となり、原典によ

る仏教研究を行いました。

木山^{きやま}捷平^{しょうへい}（一九〇四～一九六八）

詩人・小説家



岡山県出身。大正一二（一九二三）年に姫路師範学校（現神戸大学）を卒業。小学校の訓導（教諭）となるが大正一四（一九二五）年に上京して東洋大学専門学部文化学科に入学、後に中退。その後、詩集などを自費で出版するなど作詩・作歌活動を行い、太宰治等と知己を得て小説を書くようになります。

後に木山は短編小説を得意とするようになりますが、作風は端正で身近の日常を記したものが多くあります。昭和一四（一九三九）年には、『抑制の日』が芥川賞の候補作となり、翌年にも『河骨』が同賞の候補となるなど、力のある作家でしたが寡作でし

た。

昭和一九（二九四四）年に満州の新京に渡り農地開発公社の嘱託となります。ここで現地召集をうけて入隊しますがほどなく敗戦。長春で抑留生活を送ります。一年程して帰国しますがこの時の軍隊生活を描いたものが『大陸の細道』で、これは第一三回の芸術選奨に選ばれて文部大臣賞を得ました。これよりさき、昭和三十年頃にも直木賞の候補に挙がりました。芥川賞（純文学作品を対象）と直木賞（大衆文学作品を対象）という性格の異なる賞の候補者になるとは、少し珍しい出来事ですが、これは木山の作風が戦前と戦後とで変わったということでありましょう。

久保 喬（一九〇六～一九九八） 児童文学者

愛媛県出身。東洋大学専門部倫理学東洋文学科に入学するが後に中退。太宰治や檀一雄と出会い同人誌に参加します。太平洋戦争中から児童文学の執筆をはじめ、初期

の作品に『南洋旅行』『光の国・椰子の国より桜の国へ』など、当時の南進政策に影響されたものがあります。久保の得意としたのは、偉人伝であり、ベープ・ルース、二宮金次郎、高峰譲吉、ケネディ、湯川秀樹など文化人や政治家を記したものが多く見られます。また海を主題とした物語も多く、これは生地宇和島によるものでしょう。

太宰との交友関係をもとに『太宰治の青春像』という評論集を昭和五八（一九八三）年に出しましたが、久保の作品群の中では異色です。

日本児童文学者協会賞・小学館文学賞を受賞しました。

境野 哲（一八七二～一九三三） 仏教学者・東洋大学学長

宮城県の出身。専門は仏教史研究。文学博士。号は黄洋。大正七（一九一八）年以前に東洋大学の講師称号を贈られており、出身者とされています。村上專精などと共に

『仏教史林』（明治二七（一八九四）年）を刊行し、仏教史研究の近代化を図りました。これは当時の仏教研究が主に宗学（宗派の学問）を中心としたもので、仏教全体の発展を対象とした研究ではなく、仏教の発展・展開を歴史的に見る必要を論じたものです。その成果として『支那仏教精史』『支那仏教史講話』などの専著が刊行されます。この当時、中国仏教の研究はあまり進んでおらず、ことに中国仏教史の分野はほとんど空白状態でした。境野の著書はその空白を埋める役割をはたしました。こうした研究は、村上專精の日本の仏教史研究とともに、仏教研究における近代化を示すものでした。

大正七（一九一八）年、境野は哲学館出身者として初めて東洋大学学長に就任しました。

坂口 さかぐち 安吾 あんご（一九〇六～一九五五） 小説家

本名は炳五 へいご。新潟市出身。生家は新潟屈指の大地主。父の仁一郎は衆議院議員、新潟新聞社主。炳五の名は丙午生まれの五男に由来。昭和五（一九三〇）年、東洋大学文学部印度哲学倫理学科を卒業。在学中はインド哲学・仏教学関係の書を多読し、ノイローゼ状態に陥ることもありましたが、サンスクリット語などの語学に熱中することで克服したと伝えられています。さらにはアテネ・フランセに通ってフランス語を修得しました。このように一方では神経衰弱になるほど勉学につとめ、しかしそれを超克するためにさらなる無理を強いるという性格は、少年期からの性向によると思われる。その破天荒な性格は結局、自身を死に至らしめる結果となったのでした。

大学卒業後に本格的な文筆活動に従事し、新進作家として認められる作品を残しましたが、しかしこの頃の坂口の文筆活動は戦後に開花するいわゆる無頼派文学への雌伏期間となったのです。

戦後の坂口の文学活動を決定づけたのは、終戦の翌年に出版された『墮落論』で

しよう。敗戦によってそれまでの価値観・倫理観が変わっていく中で、坂口はそれが人間のもつ本来の姿であり、生きていくための当然の帰結だとしました。こうした論調の中には、仏教でいう「諸行無常」、道家の「自ずから然る」などの思想を垣間見ることができるといわれます。タイトルと内容がきわめてセンセーショナルであったことから大きな反響を呼び、以後、坂口の文筆活動の基盤にもなりました。

織田作之助・太宰治等と共に坂口は戦後派文学の第一人者として論評に、あるいは小説にと作品を発表しましたが、その多忙な生活を支えたのが戦後広く出回った覚醒剤でした。このために中毒症状を来し、ついには幻聴・幻覚にも悩まされるようになり入院。一旦は回復したものの結局薬物への依存はその後も続き、時には錯乱し、時には鬱状態に陥るなど精神状態は不安定であったようです。昭和三〇（一九五五）年、脳出血のため死去。行年四八歳。

佐佐木 喜善（一八八六～一九三三） 民俗学者

柳田國男の『遠野物語』は、明治四三（一九一〇）年に発表された岩手県遠野地方に伝わる伝承をまとめたものです。これが後に日本の民俗学の嚆矢とされるのは、主に旧土淵村（現遠野市土淵町）とその周辺の民間伝承と行事をそのまま記録したところにあります。柳田は東大法学部から農商務省に入り、当時は農政官として全国の農村を回り啓発講演活動をしていました。こうした活動によって、地方の実情を知り、民俗・民情に興味を持ったとされています。柳田の大学における研究は、「三倉」（義倉・社倉・平糶倉の三つの倉庫。災害や行事のために食料を保存する倉）を対象としていたので、もともと民俗学的な興味をもっていただのでしょう。

一方、佐佐木は土淵村の出身で、上京して哲学館に入学しましたが、後に文学に志して早稲田大学に転じました。その後、鏡石の名で小説を発表するなど、文筆活動を続けていく中で、明治四〇（一九〇七）年頃に柳田と知り合い、遠野の伝承を語ったよ

うです。柳田はこれを記録して世に出しましたが、佐佐木の話は訛りが強くて聞き取るのに苦労したと述べています。つまり、佐佐木の語りが『遠野物語』であり、この人がいなければ『遠野物語』は存在しなかったか、あるいは違った内容になっていたことになります。しかし、佐佐木家は裕福な農家で、幼少期から祖父の語る遠野の伝承話を聞いていたために、その語りは豊富なものだったのでしょう。

佐佐木が哲学館に入学したのも、井上円了の妖怪研究に傾倒したためといわれています。佐佐木自身にも、昔話を集めた『紫波郡昔話』、『東奥異聞』など数冊の書があり、座敷ワラシやオシラ神の研究もあります。

佐藤 義亮（一八七八～一九五二） 新潮社創立者・初代社長

秋田県出身。父は荒物屋を営む商人でした。読書を好み篤く仏教を信仰していたといわれます。小学校に入学した義亮は成績優秀、時には飛び級で進級しました。高等

小学校を卒業し、上級学校に進学を希望するものの、ようやく官費の師範学校の受験を許されます。しかし、師範学校は一八歳以上でなければ受験できず、小学校長の家に書生として住み込むなど苦労を重ね上京。明治二八（一九〇五）年、秀英舎（大日本印刷の前身）の職工となり夜間は哲学館哲学部に通い、明治三三（一九〇〇）年に卒業。これより先、明治二九（一九〇六）年に、雑誌『新声』を創刊。定価は五銭でした。新潮社はここから始まったのです。立志伝中の人物です。

関 敬吾（一八九九～一九九〇） 民俗学・文化人類学者・東洋大学社会学部教授

長崎県出身。大正一三（一九二四）年東洋大学専門学部文化学科卒業。卒業後に柳田國男に師事して民俗学を学び、昔話の蒐集などを行いました。当時の民俗学、殊に昔話研究では、フィンランドのユリウス・クロンヤアンティ・アールネの行った話の類型分類による原型・発生地・成立時期の解明などが広く行われていました。これを

フィンランド学派などといい、口承文芸研究に一時代を画していたのです。関はこの方法を用いて日本の昔話の類型化を行い、『日本昔話集成』（昭和五〇〜五三（一九五〇〜一九五三）年）を編纂しました。これは後に一一巻の『日本昔話大成』（昭和五三〜五五（一九七八〜一九八〇）年）となり、現存する日本の昔話の完全な記録として残されたのです。これより前に、自らが影響を受けたアンティ・アールネ『昔話の比較研究』を訳出しています（昭和四四（一九六九）年）。アールネの分類は、昔話を、動物の話・笑い話・本格的説話の三つに分けたものなのですが、関もこれに従っています。これによって、日本の昔話のヨーロッパとの比較を可能にしたのです。

戦前の日本の民俗学はドイツ流のフォルクスケンデと、イギリス流のフォークロアの二流に分かれますが、関はドイツ流に属し、文化人類学との交流も盛んでした。日本民俗学会会長、東洋大学社会学部教授を務めました。

高嶋 たかしま
米峰 べいみづ
（一八七五〜一九四九）

仏教学者・東洋大学学長



新潟県出身。浄土真宗本願寺派の寺に生まれ、明治二九（一八九六）年哲学館教育学部卒業。在学中よりキリスト教会に通うなどキリスト教の影響、特に倫理的生活を求めるなどの意識が強く、新仏教運動に携わりました。この立場から禁酒・禁煙・廃娯運動を起し貧民救済運動も行うなど、仏教による社会運動を興して婦人問題にも関わりました。著書には仏教を主軸とする啓発書が多いのですが、没後にも遺稿による出版が行われていて需要が多かったことを裏付けています。

東洋大学教授であり、かつ東洋大学第一二代学長を務めました。

能海のうみ 寛かんゆたか（一八六八〜一九〇三？）

チベット仏教者



出典：能見寛写真集

浄土真宗大谷派の僧。チベット仏教の研究者。島根県出身。上京して初め慶応義塾に入学しましたが、後に哲学館に転入しました。その後はサンクリット語研究で南条文雄に師事し、中国語を中国研究者である宮島大八（詠三）に習いました。哲学館在学中よりチベット仏教研究の必要性を論じ、チベット入国を望むものの、チベットの鎖国政策により果たすことができず、密に中国ルートからの入国を計画します。明治三二（一八九九）年大谷大学の寺本婉雅教授と四川省からの入国を計りますが、失敗に終わります。翌年、再び新疆からの入国を試みるも、難路と嶮岨に阻まれて引き返しました。さらに翌年、三たび雲南の大理を出発しましたが、音信不通、行方不明となりました。その後の調査では、雲南省のチベット国境近くで土地

の匪族に襲われて死亡したとされています。

能海は中国からの入国を計画しましたが、同じ時期、ネパールからチベットへの入国に成功したのは川口慧海です。慧海も険悪な道に難渋をきわめましたが、多くの僥倖にめぐまれたところに能海との差があったというべきでしょう。

今日この二人をチベット探検家と記す書籍が多いのですが、それは正確ではありません。二人に共通するのは求法・求経の堅い意志であり、そのためのチベット行きであったことです。逆にいえば、この意志が能海を死に導いたといえます。能海が入手したチベット語の『金剛般若経』『金光明経』が大谷大学に所蔵され、研究に資せられているのは、いささかの慰めといえます。

後に能海は、東洋大学名誉講師の称号を慧海とともに贈られています。

林はやし 古溪こけい（一八七五～一九四七） 詩人・作詩家

古溪は号。本名は竹次郎。林家は家祖を江戸の漢学者林羅山に遡る名家であり、大学頭だいがくのくみを世襲しましたが幕府の瓦解によって失職します。さらに古溪一〇歳の時に父は死去。その後、哲学館教育学部に入學し、漢学に親しみます。在学中は漢詩の作詩にその才を見せたりしますが、新体詩にも興味をもち、同好のグループを作ったといえます。明治三二（一八九九）年に卒業した後、京北中学校の教員となり、その一方では東京音楽学校に入學しています。

古溪の詩の中で最も有名なものは「はまべ」の詩でしょう。この詩が広く知られるようになったのは成田為三が曲をつけ「浜辺の歌」として親しまれたからです。ことに第二次大戦後、中学校の音楽教科書に載るようになってからは、ほとんどの日本人が一度は口ずさんだ詩となりました。作詩の時期は古溪が音楽学校に通っていた時期であり、音楽学校の学友会誌『音楽』（四巻八号・大正二（一九一三）年に発表されました。

ただし、もともとは四連詩でしたが、現在では三・四連は失われて一・二連のみが唱われています。

「亜細亜の魂……」で始まる東洋大学校歌も古溪の詩に山田耕筰が曲を付けました。

比田井ひだい 天来てんらい（一八七二～一九三九） 書家

天来は号。幼名は常太郎。後に鴻と改名しました。長野県北佐久の出身で、小学校卒業後上京し、明治二五（一八九二）年に哲学館へ入學します。主に漢文・漢学を学んだようですが、同時に当代一流の書家であった日下部鳴鶴に師事し門下生となります。後に哲学館を離れて二松學舎に転じました。

天来の書は、中国の古碑文を研究し、その骨格を再構築したもので、現在の学校書道の筆法の基礎となりました。そのため現代書道の父とも称されますが、書論にも優れた理論家として知られます。

東京高等師範学校（現筑波大学）、東京美術学校（現東京芸術大学）の講師を歴任し、帝国芸術院会員に推挙されました。

村上 専精（八五〇～一九二九） 仏教史学者

京都府出身。浄土真宗本願寺派の寺に生まれ、本姓は広崎。明治七（一八七四）年、東本願寺の高倉学寮に入り真宗学を学びます。その後、養子となり村上姓となります。明治一三（一八八〇）年、再び京都に出て東本願寺教師学校に入り、さらに真宗大学寮（現大谷大学）で講義します。明治二〇（一八八七）年、曹洞宗大学林（現駒澤大学）の講師に就任、哲学館の講師も兼任します。同時に哲学館の学生となって哲学を学ぶ、とされていますが確認できません。おそらく、非正規の聴講でしょうか。出校の際に聴講していたのでしょうか。さらに、東京大学でインド哲学の講師を務めます。その後は東京帝国大学文学部印度哲学科の初代教授、帝国学士院会員、大谷大学学長を歴任し

ました。

村上の学問は、江戸時代以来のいわゆる仏学を近代的な仏教学として構成したところにあり、『日本仏教史綱』（明治三二（一八九八）年）にみられるように、仏教の歴史的变化を知ること、日本仏教の特徴を明らかにするのが目的です。それまでの仏教研究が、宗学（宗派の学問）であったのに対して、仏教の発達・展開を視野に入れた新しい学問でした。

実は、明治中期には、仏教学だけではなく、国文学・支那学などの分野では、こうした歴史的展開の中から理解する方法が論じられ、文学史・哲学史に即した研究が行われるようになりました。村上の研究もそうした研究に影響されたものなのです。

笠 智衆（一九〇四～一九九三） 俳優

熊本県出身。生家は浄土真宗本願寺派の寺。大正一四（一九二五）年、上京して東洋

大学文学部印度哲学科に入学するが、ほどなく退学し、松竹映画蒲田撮影所の俳優研究所一期生となりました。一説では、入学の手続きをすませたあと、友人に誘われて松竹の見学に行き、そこで俳優研究所に入ったともいわれています。その直後に父が死亡したため帰省しましたが、寺を兄に譲って上京し松竹に復帰しました。しかし強い熊本訛りが抜けず、長い間いわゆる大部屋俳優として過ごしました。

昭和三（一九二八）年、この笠に端役ながら出演の機会を与えたのが小津安二郎です。この後も小津は笠を端役として出演させましたが、それ以上の役柄はありませんでした。ところが昭和一一（一九三六）年の作『大学よいとこ』で準主役の役を演じて信頼を得て、同じ年の『一人息子』では三二歳でありながら老け役をこなして評価を得ました。以後、もっぱら父親役を演じて名脇役としての地位を確立します。

笠の評価を不動のものとしたのは、昭和二〇年代に続けて世に出た小津作品によつてです。『晩春』『麦秋』『東京物語』では、絶頂期にあつた原節子の父親役（『東京物語』

では戦死した長男の嫁）という設定が笠の実年齢とも近く、無理のない演技と原の好演で輝きました。特に『東京物語』での笠は絶品です。夜明け方に息を引き取った妻を東京から駆けつけた長男・長女たちが囲む中、そつと外に出た笠を原が呼びにいく場面。尾道の浄土寺境内です。寂しさを全身ににじませるあの演技はどこから出たのでしょうか。そして一言「きょうも暑うなるぞ」。

笠の演技は、演技ではない不器用さを演技にしたところにあります。

おわりに

一つの家庭が一三〇年近い年月を経ると、第四世代から第五世代の時代になりま

す。そうなるかと転変激しい現代では、祖父祖母の代までは何とか古い記憶にたよりながら遡ることは出来ても、それより先となるとほとんど神話伝説の時代ということになります。数年前、私はある出来事から父親の兄弟姉妹の系統、つまり私にとってのオジ・オバ・イトコの関係を明らかにする書類を作らなければならぬ事態に立ち至ったことがあります。私にとっては絶望的な作業でその全てを行政書士に依頼しました。一ヶ月ほどして出来上がった書類を見て私は驚いたのです。私の生まれる前に死亡した父の兄弟の系統について、殆ど記憶にない名、あるいは一面識もない人の名があったからです。二代目でかくの如し。

さて、東洋大学といういわば一軒の家にどのような人が生まれ、どのようなになったのか、つまり東洋大学はどのような人々を輩出してきたのか。これこそが大学の存在証明アイデンティファイそのものといえます。私たちはその末端にあるわけです。もちろん、これからの東洋大学がどのように変わっていくのか、これも重要な情報の一つです。家に

は家柄という言葉があります。その家がどのような性格をもった家なのかということ。そうであれば大学柄を考えることも必要です。そして実は、その大学柄を作っていくのはいまの在学生であるということ。

東洋大学の出身者で、各界で活躍している人はきわめて多いのですが、本冊子に収めた人たちは、みな故人を選びました。すでに評価が定まっているという理由からです。それでも選ぶに当たって何を基準にしたのかという質問は出てくるものと思います。答えは「独断」です。あまり多くの人の意見を聞いていると、どうしても企画は大きくなる傾向があります。たぶんこの冊子には収まらなくなります。

現存者を入れると、自薦他薦でおおふくれています。近年の駅伝や陸上競技・水泳のヒーローもとり上げたかったですがおやめました。

また卒業生に限らず、中途退学した人も出身者には変わりありません。ですからこの人たちも収録しました。共に学んだ同窓です。

記述に当たっては、本学百周年の際に編纂された『卒業生名簿』（昭和六二（一九八七）年）が役立ちました。卒業年次が確認できなかった人も、「得業講師号の贈与」によって確認できたこともあります。さらに「ウイキペディア」にもお世話になりました。出典を記載していない写真についてはすべてここから転載しました。誰が書いたのか分かりませんが、記事はかなり正確で驚きました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 『創立一〇〇周年記念 卒業生名簿 一八九〇～一九八七』（学校法人東洋大学、一九八七年）
- 『東洋大学百年史』（通史編Ⅰ、学校法人東洋大学、一九九三年）
- 『哲学館講義録』（第一期二年級～第一期三年級、哲学館、一八八九～一八九〇年）
- 『コンサイス日本人名事典』（第五版、三省堂、二〇〇九年）
- 『日本人物レファレンス事典』（日外アソシエーツ、二〇一三年）

東洋大学史ブックレット11

人物で見る東洋大学

二〇一五年三月二〇日 発行

著者

山田利明（東洋大学文学部教授）

発行

学校法人東洋大学

東京都文京区白山五―二八―二〇 〒一〇二―八六〇六

印刷所

株式会社フクイン

東洋大学